

ボランティアの理念に関する一考察
—今日的課題とそれに対する学生の認識—

松田 次生

(西九州大学健康福祉学部社会福祉学科)

(平成21年11月5日受理)

The Philosophy of Volunteerism
— today's challenges and students' perceptions regarding them —

Tsugio MATSUDA

*Department of Social Welfare Science, Faculty of Health and Social
Welfare Science, Nishikyushu University*

(Accepted: November 5, 2009)

Abstract

The philosophy of volunteerism (characteristics and principles), is generally considered to consist of three categories; spontaneity, gratuitousness and public nature. Regarding spontaneity, the issue of “obliged volunteer activities” is discussed. As for the gratuitousness, there are issues highlighted concerning the supply of rewards and volunteer activities which request rewards such as evaluation and credits (except for financial rewards). In relation to the public nature of volunteerism, “public standards” and a balance between activities for oneself and those for society as a whole are questioned. University students’ perceptions of these issues are rather strict and many of them commented that they did not consider obliged volunteer activities, activities requesting supply of rewards, evaluation by examinations and conversion into units and those for oneself to be volunteer activities. How volunteer activities are regarded will continue to change and further discussion on this matter is needed.

キーワード：ボランティアの理念、自発性、無償性、公共性

Key words : volunteerism, spontaneity, gratuitousness, public nature

1. 研究の目的

ボランティアという言葉が誰にでも使われるようになり、ボランティア活動は特定の人たちの活動ではなくなり、多くの国民の間に普及してきた。ボランティアに関する論文や書籍も頻繁に見られるようになった。それらの文献の中では、ボランティアについての定義もときおり示されてはいるが、どちらかという定義よりボランティアの理念や原則を説明するものが書かれていることが多い。ボランティアの性格とか条件とも言われる。これについては、基本的なところではほぼ一致した説明がなされているが、具体的な解釈や用語の使い方は人によって異なり、とくに時代とともに変化してきている。

本稿ではまず、ボランティアの理念や原則なるものがどのように説明されているかについて、先行文献で整理する。次に、その原則に関して今日課題となっている問題について取りあげ、それを大学生がどのようにとらえているかについて具体的な事例を提示した調査をもとに考察する。そしてそれらをもとに、今後のボランティア活動のあり方について考察することを目的とする。

2. ボランティアの理念について

(1) 先行文献における記述

ボランティアの理念については、「理念」という表現にはなっていないものも含めて、ボランティアに関する書籍にはたいがい記述されている。それは、「ボランティアとは何か」という問い、すなわちボランティア／ボランティア活動の定義に代わるものとして書かれていることも多い。そこで、先行書籍ではどのように記述されているかを、時代の順に整理してみる。

岡本(1981)は、ボランティア活動の「性格」として、「自発性」「福祉性」「無給性」「継続性」の4つをあげ、自発性は「社会的危機や社会的な問題などの発生を契機に、一市民として積極的に行動すること」、福祉性は「自己のみの利益ではなく、共同体(コミュニティ)の成員や、苦難をもつ一人ひとりの人間の福祉を向上させるものでなければならないということ」、無給性は「有給ではなく、一市民の活動であるということ」、継続性は「課題解決のために、一定の継続したプログラムをもつということ」と説明している¹⁾。

中嶋(1999)は、ボランティアの「性格」として、「自発性」「公共性」「連帯性」「無償性」「市民性」をあげており、「自発性=自分の意思で行動しあるいは参加する活動」、「公共性=社会の発展や心豊かな生活づくりをめざす活動」、「連帯性=支えあって生きる活動」、「無償性=代償を期待しないで相手のニーズに応える活動」、「市民性=市民(民間)の立場で行う活動」と説明している²⁾。

吉村(1999)は、「ボランティアの姿」として、「自発性・主体性=自らの意思、内発的促し」、「社会性・連帯性=その時代の課題をみつめ、他者へかかわり、共感、連帯して生きる」、「先駆性・上昇性=より質の高い生き方を絶えず求める」、「無償性=損か得かの経済原則を越えた非営利性」をあげている³⁾。

入江(1999)は、ボランティアの「条件」として「自発性」「無償性」「公益性」をあげ、「自発性とは、(1)自分の責任で状況を把握し、(2)自分の責任で価値判断を行い、(3)自分の責任で行為すること」、「無償性とは、経済的な報酬(金銭、物品、サービスなど)を目的としないこと」、「公益性とは、活動が他人や社会の役に立つということ」であるとしている⁴⁾。

小谷(1999)は、文部省(当時)の生涯学習審議会の答申ではボランティアの「基本的理念」として、「自発(自由意思)性、無償(無給)性、公共(公益)性、先駆(開発・発展)性にあるとする考え方が一般的である」と述べていること、さらに中央社会福祉審議会の意見具申でも「基本的性格」として、「自発性(自由意思性)、無給性(無償性)、公益性(公共性)、創造性(先駆性)がいわれる」としていることを引用したうえで、ボランティアの理念として「自発性」を挙げることには異論がないが、「無償性」と「公共性」に関してはさまざまな議論があると述べている⁵⁾。

原田(2000)は、ボランティアの3原則として「自発性 だれかから言われてやるのではなく、自分からすすんで行う」、「無償性 物やお金をもらうことを目的としない」、「公共性 自分のためでなく、みんなのため、社会のために行う」をあげている⁶⁾。

内海(2001)は、「ボランティアとは何かという問いにたいして、通常『自発性』『無償性』『公共性』の三つの条件をともなった活動であると答えられている」とし、自発性に関しては「自発性に基づく活動とか自発的に行うとかいっても、自発性とは何かと厳密に考えると、とてもむずかしい」と述べており、一方、無償性と公共性については、「無償性とは、その活動から経済的な利益を求めないことである」、「公共性とは、ボランティア活動は社会にとって役に立つ活動だということである」と明確に定義している⁷⁾。ただし、無償性に関しては、「無償という言葉を文字どおりに金銭的な対価を一切取らないというように解釈することは無理がある」、「ビジネスとしてその活動によって利益を得ることを目的としないということであろう」と付き加え、有償ボランティアが話題になったことなどにもふれている⁸⁾。また、この三つの「規範」以外の「特性」として「創造性」「先駆性」「相互性」「継続性」「専門性」をあげている⁹⁾。

田尾(2001)は、「ボランタリズムとは、大まかにい

えば、自発性と無償性、利他性を、とりあえずの特徴として成り立っている。とりあえずというのは、その概念の外延部分は、近年急速に変容しつつあり、その中心的なところでさえ、大きく変わりつつあるからである」と述べ、3つを「特徴」と表記し、「変わりつつある」ものの例として「昨今では・・・無償という前提も脆くも崩れようとしている。有償ボランティアという言葉もでき、その活動のドメインは動揺していると言ってよいであろう」と「無償性」の解釈が変化してきていることを指摘している¹⁰⁾。また、この3つの「特徴」以外に、「先駆性」「補完性」「自己実現性」を最近では示すようになったと付き加えている¹¹⁾。

興梠(2003)は、ボランティア活動の「基本理念」として、「主体性」(活動者の自発的な意志が、最大限に尊重されなければならない活動である)、「非営利性」(活動によって生じた対価や労働による報酬を求めない拘束されない、無償の価値を尊ぶ活動である)、「公共性」(個人の利害や特定の人びとに利益を還元することを目的とせず、公共の利益を追求する活動である)、「先駆性」(変動する社会のニーズに柔軟に対応するとともに、創造的で開拓的に社会の課題に挑んでいく)の4つをあげている¹²⁾。

大沼(2004)は、ボランティア活動の「理念」として、「自発性(自由意思性)・・・強制や干渉を受けない自由意思による」、「無償性(無給性)・・・活動の対価を求めない」、「公共性(公益・普遍性)・・・成果を社会に還元していく」、「先駆性(開発・発展性)・・・社会の課題を新たに発見して取り組む」の4つを掲げている¹³⁾。

新崎(2005)は、ボランティア活動の「基本的性格」として「自発性・主体性」「公共性・福祉性・連帯性」「無償性・非営利性」「自己成長性」「継続性」の5つをあげ、それぞれ「自発性・主体性：さまざまな社会的課題に対して、自分自身の意志で積極的に関わっていくこと」、「公共性・福祉性・連帯性：個人的な利益や楽しみのための活動ではなく、共に生きる豊かな社会の創造を目指すこと」、「無償性・非営利性：金儲けの手段ではないこと。金銭面でのみかえりを期待しないこと」、「自己成長性：ボランティア自身も成長していくこと」、「継続性：継続することによって相互の信頼関係が深まること」と述べている¹⁴⁾。

池田(2006)は、ボランティア活動の「キーワード」として、「主体性・自発性・自主性：自分の意志による、他人から強制されない行為」、「社会性・連帯性・共同性：直接または間接に他者に役に立つことをめざし」、「無償性・無給性・非営利性：行為の対価として金銭を期待せず、要求しない」、「先駆性・創造性・開拓性：社会的問題の改善・解決を追求する」の4つを、それぞれ3つの用語を並列させながらあげている¹⁵⁾。

岡本(2006)は、ボランティアの「性格」として、「自発性(主体性)」「公共性(福祉性・利他性・連帯性)」「無償性(金銭的無給性)」の3つをあげ、さらに「このほか」として「先駆性(開拓性)」「変革性(抵抗性)」「体験性(学習性)」「継続性(プロセス)」をあげている¹⁶⁾。

川村(2006)は、「ボランティアは、自由意思により、基本的には、自発性、無償性、公共性、先駆性、福祉性を理念とする社会奉仕活動である」とし、5つの「理念」を示しており、具体的には、「自発性とは、他人から命令や指示を受けたり、強制されたりせず、あくまでも自主的、かつ自発的、すなわち、自分の意思にもとづき、ボランティアにかかわることである」、「無償性とは、ボランティアを行ったことの代償として金品を期待しない、ということである」、「公共性とは、自分や自分とかわりのある特定の個人、あるいは限定された関係機関・団体のためにボランティアを行うのではなく、不特定多数の一般人、あるいは関係機関・団体のために行うものである」、「先駆性とは、利用者のニーズを発見し、従来の行政施策や事業・活動にはないサービスを開発、かつ提供し、その充足を図ることにある」としている¹⁷⁾。

米山(2006)は、「ボランティアの基本的特性」として「自発性(自由意志性)」「無償性(無給性)」「公益性(公共性)」「創造性(先駆性)」の4つを取り上げ、『「自発性」』とは、自分の意思が尊重され、自己の決定によって行う行為であり、ボランティアでは最も重視されるべきものである、『「無償性」』とは、金銭的利益を目的としたり、労働としての対価を求めたりしない非営利行為である、『「公益性」』とは、その成果が広く人々や社会に利益をもたらすことをいい、『「創造性」』は、新しい分野や問題に対してより積極的に取り組み、社会を開発していくことを指している」と説明している¹⁸⁾。

三本松(2007)は、「ボランティアの原則(基本的性格)」として、「自発性・主体性」「非営利性(無償性)」「連帯性・社会性」の3つをあげており、ここでは無償性を非営利性として示し、有償ボランティア活動の経過等についてふれている¹⁹⁾。

中山(2007)は、ボランティアの「原則」として一般には「自発性」「社会性」「無償性」があげられるが、『「自発性」』のように常に定義として掲げられ、普遍性をもつ原則もある。しかし『「社会性」』『「無償性」』はその原則を危うくするような活動が幾度も登場し、そのたびに議論を巻き起こすことになる」と、概念が変化していることを論じている²⁰⁾。

長沼(2008)は、ボランティア活動の「特性」として、「自発性」「無償性」「公共性」「先駆性」の4つをあげている(先駆性を除いた3つという知見や、「継続性」を加えた5つという知見もあるが、日本では上記の4つが一般的であるとしている)²¹⁾。

(2) ボランティアの理念の整理

これらの記述から、ボランティアの定義に相当する、もしくは代わる言葉を整理すると【表1】のようになる。

18人(うち岡本は1981年と2006年の2回引用)のうち、この「定義に相当もしくは代わるものを表す用語」としては、「理念」が4人、「性格」が4人、「原則」が3人、「条件」が2人、「特性」が2人、「特徴」、「姿」、「キーワード」がそれぞれ1人に使用されている。かなりばらつきがあり、統一されていない実態が伺われる。

一方で、それらの具体的な要素については、まず、全員が「自発性」をあげている。それも、ほかのどの用語よりも先に示されている。ボランティアという言葉がラテン語の「自由意志」という意味の *Voluntas* からできたという経過を考えれば、ボランティア／ボランティア活動がまず「自発性」を重視するのは当然といえよう。なお、この自発性と並列して、もしくはカッコとじであとに書かれているものとして主体性や自主性、あるいは自由意志性・自由意思性がある。自発性と主体性は必ずしも同じものではないという見解もあるが、おおむねこれらの言葉は自発性とはほぼ同じ意味をもつものであろう。

次に、これも18人全員があげているのが「無償性」である。ただし、無償性ではなく2人は「非営利性」、1人は「無給性」と表記している。さらに、無償性のあとに並列もしくはカッコとじで「無給」あるいは「非営利性」と書いている人がそれぞれ4人、2人である。これ

も、無償と無給もしくは非営利は厳密には異なるものであると解釈できるが、おおむね儲け主義ではないということでは共通する概念であろう。ただし、後述するように、一時有償ボランティアという言葉が流行したり、最近ではボラバイトという言葉が使われている実態を見ると、無償性に関しては解釈に揺らぎが生じてきていることが明らかである。そのような事実から、一部ではあえて無償性ではなく非営利性が使われているものと思われる。

もう一つ、全員に共通しているのが「ボランティア活動は社会や他人のためになる活動である」というとらえ方である。この理念を表す言葉は少し幅があって、「公共性」が11人、社会性が3人、連帯性が2人、福祉性が2人、公益性、利他性がそれぞれ1人であった(ただし、一人は社会性と連帯性を同類のものとして並列にはなく、別個のものとして記述。また、別の一人は公共性と福祉性を別個のものとして記述)。また、後ろに並列して書かれたりカッコとじで書かれたりしているものでは、連帯性が4人、福祉性が2人、公益性、普遍性、共同性、利他性、公共性、社会性がそれぞれ1人であった。なお、自発性の次に無償性もしくはその関連をあげている人が11人、公共性もしくはその関連をあげている人が7人で、2番目に重視されているのは無償性のほうが多いことが分かる。

ここまでで明らかになったのは、ここ最近に出版され

【表1】 ボランティアの概念を表す用語の比較

著者	記述年	用語	具体的な要素を表す用語
岡本	1981	性格	自発性 無給性 福祉性 継続性
中嶋	1999	性格	自発性 無償性 公共性 連帯性 市民性
吉村	1999	姿	自発性・主体性 無償性 社会性・連帯性 先駆性・上昇性
入江	1999	条件	自発性 無償性 公共性
小谷	1999	理念	自発性 無償性 公共性
原田	2000	原則	自発性 無償性 公共性
内海	2001	条件	自発性 無償性 公共性 創造性 先駆性 相互性 継続性 専門性
田尾	2001	特徴	自発性 無償性 利他性 先駆性 補完性 自己実現性
興梠	2003	基本理念	主体性 非営利性 公共性 先駆性
大沼	2004	理念	自発性(自由意思性) 公共性(公益・普遍性) 無償性(無給性) 先駆性(開発・発展性)
新崎	2005	基本的性格	自発性・主体性 無償性・非営利性 公共性・福祉性・連帯性 自己成長性 継続性
池田	2006	キーワード	主体性・自発性・自主性 無償性・無給性・非営利性 社会性・連帯性・共同性 先駆性・創造性・開拓性
岡本	2006	性格	自発性(主体性) 無償性(金銭的無給性) 公共性(福祉性・利他性・連帯性) 先駆性 変革性 体験性 継続性
川村	2006	理念	自発性 無償性 公共性 先駆性 福祉性
米山	2006	基本的特性	自発性(自由意志性) 無償性(無給性) 公益性(公共性) 創造性(先駆性)
三本松	2007	原則(基本的性格)	自発性・主体性 非営利性(無償性) 連帯性・社会性
中山	2007	原則	自発性 無償性 社会性
長沼	2008	特性	自発性 無償性 公共性 先駆性

たボランティア関係の書籍を見るかぎりにおいては、その理念(性格、原則、条件、特性等とも表現されている)には、「自発性(自主性、主体性、自由意思性)」「無償性(非営利性、無給性)」「公共性(社会性、公益性、福祉性、利他性、連帯性)」があげられており、著者18人が全員これらについてはとりあげている。

これらの3つの「理念」以外で多かったのが「先駆性」で、18名中10名が先ほどの3つのあとに記述している。ボランティアが公的サービスの先駆的役割をもつというものであり、開拓性とか創造性という表現も見られる。次に「継続性」をあげている人が4人あり、続けてこそボランティア活動だといえることが提起されている。そのほか、「補完性」「市民性」「自己実現性」「相互性」「変革性」「体験性」をあげている著者もあった。

次の3では、全員が理念・性格等としてあげている「自発性」「無償性」「公共性」に関する課題を取り上げる。

3. ボランティアの理念に関する今日的な課題

(1) 「自発性」に関して

ボランティアの自発性に関する今日の課題としては、「奉仕活動の義務化」の問題がある。「奉仕活動の義務化」については、中央教育審議会が2002年7月に奉仕活動を小中高校の教育活動の中に位置づけ、参加を義務づける中間報告を文部科学省に提出して以来、関係者の間では賛否両論の議論が繰り返さされてきた。ここでは、奉仕活動を「自分の時間を提供し、対価を目的とせず、地域や社会のために役立つ活動」と定義し、「興味・関心を持っている人に『きっかけ』『後押し』となる仕組みが必要」とし、「小中高校での奉仕活動を教育活動に位置づける」としている。

ここでは、「奉仕活動」と表現しているので「ボランティア活動」とは区別して考えるべきかもしれない。しかし、この答申の中でも「ボランティア活動」という言葉と「奉仕活動」という言葉が混在しているし、一般的には未だ「奉仕活動」と「ボランティア活動」がほぼ同意語として理解されている面もある。したがって、ここで使われている「奉仕活動」が「ボランティア活動」として解釈され、中教審が提起しているのは「ボランティア活動の義務化」であると受け止められる可能性は高いとみるべきであろう。

そうすると、ボランティア活動は自発的な行動であるという理念と、そのボランティア活動を「義務づける」というのは相反することであり、「ボランティア活動の義務化」というのはその言葉の中に矛盾をはらんでいるといえよう。ただし、奉仕活動とボランティア活動とは異なるもので、ボランティア活動は自発的なものであるが奉仕活動はそうではなく義務化・強制もあり得ると解

釈すれば、「奉仕活動の義務化」は言葉の上では矛盾しない。しかし、中教審が提起している「奉仕活動」の中身は、日常的にすでにおこなっている「ボランティア活動」の中身と重なる部分がたくさんあり、教育現場では「ボランティア活動の義務化」としか受け取られないであろうことは、容易に推測できる。

松田(2008)の短大生を対象にした調査では、「小中高校時代にどのようなボランティア活動をおこなったか」という質問に対して、「学校行事としておこなった地域での美化活動」をあげている学生が調査対象者の約5割いた(ボランティア活動体験者の約3分の2はこの活動をあげていた)²²⁾。義務化に近いこの形態での活動がすでに学校現場では定着している感も否めないが、ボランティア活動の推進という立場から、はたして正常な形であるかの検討を要すると思われる。

(2) 「無償性」に関して

ボランティアの無償性に関しては「交通費や謝礼の支給」や「ボランティア活動の評価」の問題がある。

「ボランティアの無償性」については、2の(2)で取りあげた各著者の記述にも、さまざまな議論があること、時代とともに無償性に対するとらえ方が変化していることが書かれている。そこでは「有償ボランティア」という言い方が広がったり、「無償性」と言わずに「非営利性」と言う表現になってきたりしていることが示されている。とくに、交通費や若干の謝礼が支給されることに対して、どこまで(どの程度まで)支払ってもボランティア活動というのか、という問いが生じている。

また、「無給性」もしくは「金銭的無給性」という言葉でこの理念を表している著者もあったが、ここでいう無給というのは金銭的・経済的報酬を求めないということを目指すと思われる。では、金銭以外の報酬を求めるのはボランティアの理念に反するのか反しないのか、という問題が生じてくる。「やりがい」や「生きがい」という報酬はまだしも、「入学試験や入社試験での合格」という報酬を求めて活動をするとなると、はたしてそれはボランティア活動といえるのかどうか、である。2002年の中央教育審議会では、「高校、大学入試でボランティア活動を評価」するよう提言しているし、実際に入学試験や入社試験でボランティア活動は多くの高校・大学や企業から評価されている。結果として評価を受けるのなら問題はないが、評価を目的として、すなわち合格という報酬を求めてボランティア活動を行うとなると、それは無償性に反しないのかという問題が浮上する。

さらに、同じく中央教育審議会は「高校、大学で奉仕活動を単位認定」するよう提言している。これも結果として単位認定されるのなら特段問題にしくなくてもいいかもしれないが、単位認定を目的として、すなわち単位と

いう報酬を求めての活動となれば問題なしとはいえないであろう。

(3) 「公共性」に関して

ボランティアの公共性に関しては「自己実現・自分探しのボランティア」や「公共性の基準」の問題がある。

「ボランティア活動は社会や他人のためにおこなうものである」というボランティアの公共性の理念から考えると、自己実現や自分探しのボランティア活動は自分のためにおこなう活動であるから、公共のためではない。そのような活動をボランティア活動の範疇に入れていいかどうかという問題である。結果としてその活動が社会や他人のためになるならそれはボランティア活動といえるかもしれないが、あくまでも目的が自分のためというところに矛盾がないのかを考察してみる必要がある。

また、「社会のため」といっても、どのような活動は社会のためになり、どのような活動は反社会的なものかは、判断が定まらないものもある。とくに、建設反対運動などがそうである。また、「社会のため」の程度もさまざま、どのような社会的活動までをボランティア活動というのかは、判断が難しいところがあるであろう。

4. ボランティア活動に関する諸問題に対する大学生の意識

(1) 調査の目的

ボランティア活動の自発性、無償性、公共性に関して、論議され、意見も分かれている問題に対して、大学生がどう考えているかを調査する。

(2) 調査の方法

①調査内容

議論になっている問題に関して、事例をあげて、それを「ボランティア活動である」と思うか、それとも「ボランティア活動ではない」と思うかを問い、考え方を調査する。具体的には、(1)「ボランティアの義務化」に関する事例 (2)「ボランティア活動に対する謝礼支給」に関する事例 (3)「ボランティア活動の入学試験・入社試験での評価」に関する事例、(4)「ボランティア活動の単位認定」に関する事例、(5)「自己実現・自分探しのボランティア」に関する事例、(6)「公共性」に関する事例、を調査する。

調査は、これらの問題だけでなく、広くボランティア活動とはどのようなものを指すと大学生が思っているか

【表2】「ボランティア活動に関するアンケート」の質問項目

1. 中学校のクラブで敬老の日に一人暮らし高齢者の家庭を訪れプレゼントを届けた。
2. 年末助け合い運動の募金活動に参加した。
3. 地域の少年サッカーチームの監督を無報酬でやっている。
4. 電車でお年寄りに席を譲った。
5. 毎月1回施設を訪問し、無償で利用者さんの散髪をしている。
6. 学童保育新設の運動をやっている。
7. 視覚障害者のガイドヘルプを1時間500円の契約でやっている。
8. 高校の学校行事として生徒全員で町の清掃活動をおこなった。
9. 自分が福祉に向いているかどうかを確かめるために高齢者施設で介護活動をした。
10. 献血をした。
11. 全員参加となっている町内会の清掃活動に参加した。
12. 毎日隣家の90歳のおじいさんに声かけをして安否を確認している。
13. 免停が取り消し(回復)になるというので環境美化活動(落書き消し)に参加した。
14. 横断歩道を渡っている視覚障害者を見かけたのでガイド(手引き)をして一緒に渡った。
15. 友人に誘われて障害者団体の行事の手伝いに行った。
16. 手話サークルで手話を勉強している。
17. 施設の夏祭りの手伝いを1日おこなって交通費と日当1000円をもらった。
18. 小学校で授業の一環として、毎月1回地域貢献活動を義務づけてやっている。
19. 同好者が集まって郷土史の研究をしており、その世話人をしている。
20. 大地震のニュースを見て、いてもたってもおられず、現地に行って復旧活動に参加した。
21. 精神障害者施設の建設反対運動をやっている。
22. 発展途上国の子どもの医療費のため毎月1000円送金している。
23. 利用者さんに喜んでもらえて生きがいを感じるので障害者施設の訪問を続けている。
24. 所定の時間やると大学の単位になるので施設に行っているいろいろな活動をした。
25. 社会福祉協議会主催の福祉まつりで会場係の仕事をして、交通費のみもらった。
26. 小学校のPTAの会長をしている。
27. 手話通訳を1回(2時間)あたり3000円でやっている。
28. 道ばたに空き缶が落ちていたので拾ってゴミ箱に捨てた。
29. 深夜営業風俗店の建設反対運動をやっている。
30. 大学入学に有利と思ったので老人ホームを訪問していろいろな活動をおこなった。

を調べるため、【表2】に示す30項目の事例をあげた。
この30項目のうち、

「8. 高校の学校行事として生徒全員で町の清掃活動をおこなった。」「18. 小学校の授業の一環として、毎月1回地域貢献活動を義務づけてやっている。」は「ボランティアの義務化に関する事例」として取りあげる。

次に、「7. 視覚障害者のガイドヘルプを1時間500円の契約でやっている。」「17. 施設の夏祭りの手伝いを1日おこなって交通費と日当1000円をもらった。」「25. 社会福祉協議会主催の福祉まつりで会場係の仕事をして、交通費のみもらった。」「27. 手話通訳を1回（2時間）あたり3000円でやっている。」は「ボランティア活動に対する謝礼支給に関する事例」として取りあげた。

次に、「30. 大学入学に有利と思ったので老人ホームを訪問していろいろな活動をおこなった。」は「ボランティア活動の入学試験・入社試験での評価に関する事例」としてである。

さらに、「24. 所定の時間やると大学の単位になるので施設に行っているいろいろな活動をした。」は「ボランティア活動の単位認定に関する事例」である。

また、「9. 自分が福祉に向いているかどうかを確かめるために高齢者施設で介護活動をした。」は「自己実現・自分探しのボランティアに関する事例」として取りあげた。

最後に、それ以外の項目はほとんど公共性に関する質問であるが、ここではとくに「6. 学童保育新設の運動をやっている。」「21. 精神障害者施設の建設反対運動をやっている。」「29. 深夜営業風俗店の建設反対運動をやっている。」を「公共性に関する事例」として取りあげる。

②調査対象

N大学健康福祉学部1年204名

③調査期日

2009年7月15日

④倫理的配慮

本調査は、「ボランティア概論」というテーマの授業の冒頭に、受講者がどのような活動をボランティア活動としてとらえているかを知りたいという調査目的を説明して実施した。また、提出してもらった回答（データ）は統計的処理をするのみで個人の特定には至らないこと、授業評価には無関係であることも説明して、無記名でおこなった。さらに、結果については調査の次週の授業時にすべてを公表（資料配付）した。

(3) 調査結果

ここで取りあげる12項目の結果は【表3】のとおりである。

①「ボランティアの義務化」に関して

まず、「高校の学校行事として生徒全員で町の清掃活動をおこなった」については、「ボランティア活動である」が83.3%、「ボランティア活動ではない」が9.8%であった。ほとんどがボランティア活動とみなしている。次に、「小学校の授業の一環として、毎月1回地域貢献活動を義務づけてやっている」については、「ボランティア活動である」が34.8%、「ボランティア活動ではない」が42.6%であり、この質問では「どちらともいえない」が22.1%と多く、判断に迷っている様子が見られる。

【表3】 ボランティア活動に関するアンケート集約結果

事 例	ボランティア活動である	ボランティア活動ではない	どちらともいえない
高校の学校行事として生徒全員で町の清掃活動をおこなった。	170人(83.3%)	20人(9.8%)	13人(6.4%)
小学校で授業の一環として、毎月1回地域貢献活動を義務づけてやっている。	71(34.8)	87(42.6)	45(22.1)
視覚障害者のガイドヘルプを1時間500円の契約でやっている。	16(7.8)	159(77.9)	29(14.2)
施設の夏祭りの手伝いを1日おこなって交通費と日当1000円をもらった。	20(9.8)	156(76.5)	27(13.2)
社会福祉協議会主催の福祉まつりで会場係の仕事をして、交通費のみもらった。	76(37.3)	96(47.1)	32(15.7)
手話通訳を1回（2時間）あたり3000円でやっている。	12(5.9)	165(80.9)	27(13.2)
大学入学に有利と思ったので老人ホームを訪問していろいろな活動をおこなった。	76(37.3)	83(40.7)	44(21.6)
所定の時間やると大学の単位になるので施設に行っているいろいろな活動をした。	41(20.1)	119(58.3)	44(21.6)
自分が福祉に向いているかどうかを確かめるために高齢者施設で介護活動をした。	58(28.4)	97(47.5)	49(24.0)
学童保育新設の運動をやっている。	112(54.9)	64(31.4)	28(13.7)
精神障害者施設の建設反対運動をやっている。	27(13.2)	134(65.7)	42(20.6)
深夜営業風俗店の建設反対運動をやっている。	33(16.2)	123(60.3)	48(23.5)

②「ボランティア活動に対する謝礼支給」に関して

まず、「社会福祉協議会主催の福祉まつりで会場係の仕事をして、交通費のみもらった」については、「ボランティア活動である」が37.3%、「ボランティア活動ではない」が47.1%であった。続いて、「施設の夏祭りの手伝いを1日おこなって交通費と日当1000円をもらった」については、「ボランティア活動である」が9.8%、「ボランティア活動ではない」が76.5%であった。また、「視覚障害者のガイドヘルプを1時間500円の契約でやっている」は、「ボランティア活動である」が7.8%、「ボランティア活動ではない」が77.9%であった。さらに、「手話通訳を1回（2時間）あたり3000円でやっている」は、「ボランティア活動である」が5.9%、「ボランティア活動ではない」が80.9%であった。なお、それぞれ「どちらともいえない」が15.7%、13.2%、14.2%、13.2%であり、判断に若干の迷いもみられる。

③「ボランティア活動の入学試験・入社試験での評価」に関して

「大学入学に有利と思ったので老人ホームを訪問していろいろな活動をおこなった」については、「ボランティア活動である」が37.3%、「ボランティア活動ではない」が40.7%、「どちらともいえない」が21.6%で、意見が分かれた。

④「ボランティア活動の単位認定」に関して

「所定の時間やると大学の単位になるので施設に行っている活動をした」については、「ボランティア活動である」が20.1%、「ボランティア活動ではない」が58.3%、「どちらともいえない」が21.6%であった。かなりの人がこれはボランティア活動とはみなしていないことが分かる。

⑤「自己実現・自分探しのボランティア」に関して

「自分が福祉に向いているかどうかを確かめるために高齢者施設で介護活動をした」については、「ボランティア活動である」が28.4%、「ボランティア活動ではない」が47.5%、「どちらともいえない」が24.0%であった。半数近くはボランティア活動とはみなしていないが、どちらともいえないと迷っている人も多かった。

⑥「公共性」に関して

ここでは3つの住民運動を事例としてあげたが、まず「学童保育新設の運動をやっている」については、「ボランティア活動である」が54.9%、「ボランティア活動ではない」が31.4%であった。次に、「深夜営業風俗店の建設反対運動をやっている」については、「ボランティア活動である」が16.2%、「ボランティア活動ではない」

が60.3%、「どちらともいえない」が23.5%であった。さらに、「精神障害者施設の建設反対運動をやっている」については、「ボランティア活動である」が13.2%、「ボランティア活動ではない」が65.7%、「どちらともいえない」が20.6%であった。

(4) 考 察

ボランティアの自発性に関しては、両事例ともいわば全員強制の活動であり、自発性が保証されているかが問題になるところであるが、「高校の学校行事としての地域清掃活動」はボランティア活動として認識している学生が多いのに対して、「小学校での月1回の地域貢献活動の義務づけ」はボランティア活動ではないとの意見が多かった。質問文に後者は「義務づけ」というのがあったのに対して前者はそれがなかったことが両者の反応の違いかもしれないが、「学校行事」という形と「授業の一環」というところも両者の差になったのかもしれない。さらに、分析が必要なところである。

ボランティアの無償性に関しては、交通費のみの支給の場合は37.3%、交通費と日当1000円の場合は9.8%、1時間500円の場合は7.8%。1時間1500円の場合は5.9%の人しかボランティア活動であるとは判断しておらず、逆にそれぞれ47.1%、76.5%、77.9%、80.9%はボランティア活動ではないとみなしている。今日、ある程度の謝礼支給は珍しくなくなってきており、有償ボランティアとかボラバイトという言葉も広がっている中、調査に答えた学生たちはそれにかなり否定的であることが分かった。

同じくボランティアの無償性に関するものとして設定した「ボランティア活動の入学試験・入社試験での評価」については、それが広く普及している現在ではあるが、それを目的とした活動がボランティア活動といえるかどうかは、意見がほぼ半分ずつに分かれた。この制度に対する賛否を問う質問ではなく、間接的に聞いたものであったが、活動の結果が純粋に評価されるのならともかく、それを目的とした活動であれば疑問符がつくという判断であろう。

また、「ボランティア活動の単位化」については、それを目的とした活動はボランティア活動ではないという意見がきわめて多かった。これもかなり定着化している今日ではあるが、また、直接賛否を問う質問ではなかったが、学生の反応はやや否定的と受け止められる。ただし、前記の「評価」とこの「単位化」については「どちらともいえない」が20%を越えており、学生が判断に迷っている様子もうかがわれる。

ボランティアの公共性に関するものとして設定した、いわゆる「自分探しのボランティア活動」については、それはボランティア活動ではないという意見がやや多

かった。これは自分中心の行動であるという批判がある中、学生の認識もそれに近いということが分かった。しかしこれも、「どちらともいえない」が24%と多く、一概に決めつけられないという問題であろう。

どのような住民運動がボランティア活動とみなされるかについては、「学童保育新設運動」が「ボランティア活動である」が多く、「精神障害者施設の建設反対運動」が「ボランティア活動ではない」が多かったのは筆者の予想どおりであったが、「深夜営業風俗店建設反対運動」が「ボランティア活動ではない」が多かったのは意外であった。青少年の健全育成の視点で反対運動が展開されることが多いが、風俗店自体は反社会的なものではなく、この運動は精神障害者施設反対運動と同じく地域エゴという判断なのかもしれない。あるいは、「学童保育新設運動」も「ボランティア活動である」は54.9%であるものの、「ボランティア活動ではない」が31.4%であったことからみると、このような運動自体がボランティア活動であるとの認識が薄いという解釈もありうるだろう。

5. おわりに

自発性とからむ「ボランティア活動の義務化」に関しては、本調査の結果でははっきりしない部分が残った。「地域貢献活動を義務づけてやる」というのはあまりボランティア活動としてはみなさないが、いわゆる自発的ではなくても、学校全体で取り組む活動は、それほど義務感は伴わないということのようである。義務化をめぐるのは今後も議論は続くと思われるが、ボランティア活動を学校教育の中にもっと積極的に取り入れることは重要であるとしても、義務感を伴わない形の導入が望まれる。それは、教育行政主導の上意下達的な進め方ではなく、学校それぞれの実態に応じた、児童・生徒の意思や行動が中心となる取り組みを進めることであろう。

無償性に関わる報酬の問題は、今後も試行錯誤は続くであろう。阪神・淡路大震災を機としてボランティア元年なるものが言われてきたが、実態はさほどボランティアは増えていないという見方もあるし、昨今の不景気から若い世代も仕事やアルバイトに忙しく、ボランティア活動にまで気が回らないという状況にあると思われる。一方で、福祉現場では人手不足を補うボランティアが欲しく、やむを得ず少しの報酬を出して人集めをするという形をとらざるをえなくなっている現実もある。まさに、ボランティアの限界からボラバイトの出現である。今後、ボランティアの概念を広げて一定の報酬を与える活動もボランティア活動というのか、それともボランティア活動はあくまでも無償であることにこだわり、一定の報酬を与えるのはボラバイトなどの新しい概念で取

り扱うかの議論が必要であろう。

ボランティア活動の入学試験・入社試験での評価や、ボランティア活動の単位化については、それがかなり定着してきており、それなりの意義は認められるが、それを目的とした活動がないかどうかを、教育現場も、ボランティア活動を受け入れる現場も注目しておく必要があるだろう。

公共性に関する問題はさらに複雑なものを含んでいる。ボランティア活動は社会や他人のためになる活動であるという古典的な概念が、自分探しの活動やボランティア活動を評価するという取り組みによって、揺らいできている。また、いわゆる「社会のため」といってもその基準は必ずしも絶対的なものではなく、「自分のため」との境界が、価値観の多様化の中であいまいになってきている。すなわち、世間一般のボランティア活動に対する見方は、以前のような滅私奉公というようなとらえ方ではなくなり、人のためでもあるが自分のためでもあるという考え方が広がってきている。そのとき、仮に「自分のため」というのを否定しないとしても、利他と利己のバランスが問われるのではないと思われる。

最後に、全般的に「どちらともいえない」を選んだ学生がかなり多かった。このことは、調査に応じた学生が、示された事例に対して判断に迷ったということであろうが、ボランティア活動に対する考え方は今後もさらに変動していくと思われる。十分な論議が必要である。

引用文献

- 1) 大阪ボランティア協会『ボランティア』ミネルヴァ書房 pp30~31 (1981)
- 2) 中嶋充洋『ボランティア論』中央法規 pp18~21 (1999)
- 3) 吉村恭二『ボランティアの世界』築地書館 p38 (1999)
- 4) 内海成治・入江幸男・水野義之『ボランティア学を学ぶ人の為に』世界思想社 pp6~10 (1999)
- 5) 小谷直道『市民活動時代のボランティア』中央法規 pp38~39 (1999)
- 6) 原田隆司『ボランティアという人間関係』世界思想社 p30 (2000)
- 7) 内海成治『ボランティア学のすすめ』昭和堂 pp ii~iii (2001)
- 8) 内海成治『ボランティア学のすすめ』昭和堂 p ii (2001)
- 9) 内海成治『ボランティア学のすすめ』昭和堂 p iii (2001)
- 10) 田尾雅夫『ボランティアを支える思想』すずさわ書店 pp23~25 (2001)

- 11) 田尾雅夫『ボランティアを支える思想』すずさわ書店 pp25～27 (2001)
- 12) 興梠寛「ボランティアリズム・ボランティア」『現代のエスプリ (436) ボランティアリズム』至文堂 p36(2003)
- 13) 立田慶裕『参加して学ぶボランティア』玉川大学出版部 p67 (2004)
- 14) 岡本榮一『ボランティアのすすめ』ミネルヴァ書房 pp24～26 (2005)
- 15) 池田幸也『現代ボランティア論』久美 p16 (2006)
- 16) 岡本榮一・菅井直也・妻鹿ふみ子『学生のためのボランティア論』大阪ボランティア協会 p10(2006)
- 17) 川村匡由『ボランティア論』ミネルヴァ書房 pp 4～6 (2006)
- 18) 米山岳廣『ボランティア活動の基礎と実際』文化書房博文社 pp 7～8 (2006)
- 19) 三本松政之・朝倉美江『福祉ボランティア論』有斐閣 pp13～15 (2007)
- 20) 中山淳雄『ボランティア社会の誕生』三重大学出版会 pp60～61 (2007)
- 21) 長沼豊『新しいボランティア学習の創造』ミネルヴァ書房 p42 (2008)
- 22) 松田次生「児童・生徒のボランティア体験に関する一考察」『西九州大学健康福祉学部紀要』pp49～55 (2009)